

# 鳥取の手仕事

## 伝統の技と新たな挑戦

### 鳥取県の鍛冶 [第10回]

鳥取県でも、包丁や鋏、鎌などの鉄製道具や農具を手仕事で作る、昔ながらの鍛冶屋は数少なくなりました。今回は、その技術を今でも継承している伝統工芸士を紹介します。



鎌の刃を鍛える作業 中島刃物製作所

#### 室町時代から続く鍛冶屋 ひろせや刃物製作所(倉吉市)

県中部は、古くから中国山地の良質な砂鉄を利用した鍛冶技術が進んだ地域で、刀鍛冶・千歯鍛冶・野鍛冶が営まれてきました。千歯鍛冶とは、稲を脱穀する道具「稲扱千歯」を作る職人です。倉吉市は、江戸時代から大正時代にかけて「伯州倉吉千歯」の産地として栄えました。野鍛冶とは、鋏、鎌などの農具を作ったり、修理したりする職人です。昔の町並みが残る八橋往來の街道沿い、その名も「鍛冶町」。ここで代々野鍛冶を継承し、九代目になる廣吉博司さんは、約60年の経験を持つ現役職人。6歳の時から祖父、父親の手伝いを始め、18歳頃から本格的に家業に入りました。種類がとて多い農具製作



は、すべて修得するのに20年かかったそうです。

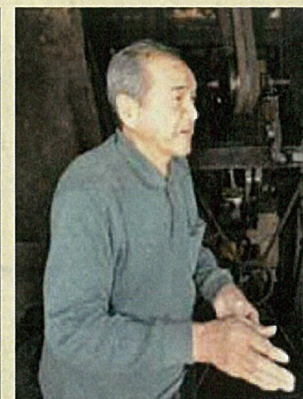
「腰を痛めて、今は休んでいるんです」と控えめに語る廣吉さん。重労働の鍛冶の仕事は近年まで続けてきました。

「戦中だったかな、草刈りの競争の中国地区大会があつて、うちの道具を買いに来てくださった。昔は、一軒の農家が、半年で鎌を5枚は買ってくださつておつた」と振り返る廣吉さん。鎌や鋏などの農具は暮らしや産業を支える大切な道具だったので。

日常生活から産業まで、色々な道具が自動化され、ボタンひとつで多くのことが簡単にできるようになった現代ですが、今でも鎌、鋏や包丁などの道具の愛用者は多く、修理の問い合わせがよくあるそうです。

#### 因幡刃物の継承 中島刃物製作所(若桜町)

古くから山林業が盛んな鳥取県東部(因幡地方)は、街道沿いの主要な宿場町でした。多種多様な技能を持つ多くの職人が暮ら

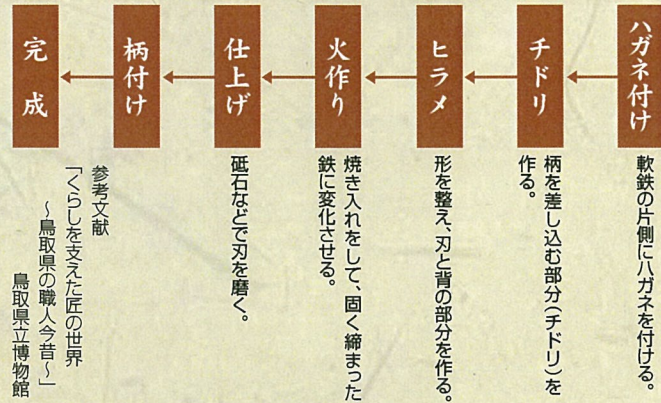


右/ひろせや製の鎌。上は使用前、下は大切に使い込まれて磨耗した刃  
中/鍛冶機の前で語る廣吉さん  
左/真鍮製の鋏と向き合う中島さん。熟練の技と研ぎ澄まされた感覚で優れた道具が生み出される



中島刃物製作所の製品。鋏、各種包丁、鉈、鎌、切れ味は折り紙つき

#### 鎌の製作工程



していた若桜宿や智頭宿では、生活に欠かせない鉈、鎌、鋏など軽くて使いやすい良質の刃物や道具が作られています。  
お兄さんとともに家業を継いだ中島節夫さんは、18歳から父親に師事し技を磨いてきました。「昔はたくさん注文があつて、技術を身につけるには良い環境でした。それでも、ひととおりの覚えるのに十年はかかります」と語りながら、流れるような手さばきで作

業は進み、あつという間に鎌の形になっていきます。「刃の厚みは、0.1ミリ単位でわかりますよ」と何気なく答える中島さん。その言葉には、修練を重ねてきた年月の重みがこもっています。「近年、農業、林業、漁業などからの注文が減ったねえ。自然との関わり方が変わったんだね」。時代の移り変わりが、匠の技の存続にも影響しています。

昭和後期までは、鳥取県の東・中西部それぞれに鍛冶組合があり、地元の鍛冶屋もたくさんありましたが、現在では県内で数軒にまで減りました。廣吉さんや中島さんたちが作る包丁や農具などは、手入れや研ぎ直しをすることでとても長く使うことができます。そんな道具を日常生活の中で末永く愛用して、手仕事の良さを実感してみませんか？



金槌

火ばし

砥石

原料の鉄材から完成まで、加熱し、叩き延ばす作業を繰り返して徐々に形を作っていく。温度管理と叩く加減が重要(ひろせや製作 鳥取県立博物館蔵)

#### 詳しくは…

- とりネット  
「ととりの手仕事」(手仕事全般)  
<http://www.pref.tottori.lg.jp/teshigoto>
- 「ととりの工芸品」(伝統的工芸品)  
<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=95598>
- パンフレット「鳥取の手仕事」  
(鳥取県市場開拓室発行)をご覧ください。

問合せ先 県庁観光政策課  
電話 0857-26-7237



- 1 中島刃物製作所(若桜町若桜)
- 2 大塚刃物鍛冶(智頭町三吉)
- 3 ひろせや刃物製作所(倉吉市鍛冶町)